

「二人の長命画家の死」

昨年12月24日のクリスマス・イヴに画家安野光雅さんが亡くなられた。この3月1日には篠田桃紅さんが亡くなられた。私の好きな二人の画家の相次ぐ逝去だが、安野さん94歳、篠田さん107歳(あと27日で108歳になったのだが)とお二人とも長命だったのは救いだった。篠田さんは3月生まれにちなんで桃紅と父親に名づけられたのだが、その3月に旅立たれた。

安野さんには柔らかい色合いのヨーロッパの旅の風景はじめ、絵本、数やABCの話、平家物語やシェークスピアの劇の絵、日本の歌の絵、きり紙など沢山の作品があるが、その中でも安野さんと

同じ津和野出身の鷗外がドイツ語版から重訳したアンデルセンの「即興詩人」の絵本化は特筆される。鷗外の文語体の美しさに感動した安野さんは絵本にされる前に口語訳に挑戦している。その即興詩人の絵を求めてイタリアをスケッチして歩いたが、「イタリアに一度も行かなかったのに、鷗外のイタリア風景描写の訳の正確さに驚かされた」と述べている。

もう一つ印象的だったのは、永年司馬遼太郎の「街道をゆく」の挿絵を担当していた須田剋太氏が亡くなられた時、その後任に全く対照的な作風の安野さんが選ばれたことだ。その後安野さんは須田さん同様、司馬さんと同じようなコロンビ振りを發揮され、「街道をゆく」を彩った。

鷗外研究の端くれを汚している私は、鷗外の史跡を訪ねるべく数年前津和野を訪れた。森家は津和野藩(亀井家)代々御典医であったが、火事と薬の調

合ミスという2度の科で碌高を減じられ、城下のはずれに転居させられたため、鷗外記念館は町はずれという感じのところにあつた。それに対し「安野光雅美術館」は、駅の斜め前に蔵造りの堂々たる居様で立っていた。今や津和野観光の目玉がこの美術館なのだろう。ゆつたりとした展示室を幾つかめぐり、安野作品を堪能した先には村の分教場を模したような教室があり、オーディオ資料など視聴できる仕掛けがされていた。その教室の机に秋の陽射しが窓越しに差し、触ると幽かにぬくもりが感じられたのを今でも鮮明に覚えている。そのぬくもりは安野さんの人柄だと思えた。

たくさんある安野さんの画集の中で、私が一番気に入っているのは「中国故景」という中国の色々な街の古い街並みをスケッチした白黒の画集だ。とにかく「懐かしい」感じが良いのと、安野さんのスケッチ技術が手に取るように

わかるのだ。時折、取り出して眺めている。安野さん有難う。合掌

篠田桃紅さんは、晩年日野原重明さんと長寿の男女代表のような存在だった。日野原さんが亡くなられると、名エッセイストの篠田さんは「百歳の力」に続いて「一〇三歳になって分かったこと―人生は一人でも面白い」というエッセイ集を出され話題となった。その後「桃紅一〇五歳好きなものと生きる」と併せ「一〇五歳、死ねないのも困るのよ」を出版されるなど、出版でも活躍されていた。私としてはずっと困っていた欲しいと願っていたのだが、篠田さんにしてみれば「やっと死ねた」というところか。

篠田さんの墨による抽象絵画表現は、書道という枠を完全に脱したもので、初めて作品に出逢った時の衝撃は清新だった。「水墨の抽象画＝墨象」と呼ばれたが、画面からは何時も白と墨(それ

に朱泥、金銀箔が加わることもあるが)が心地良い緊張を与えてくれた。白い画面に墨を引く時の緊張感がリアルに感じられた。この緊張感を与える源泉は、和服をきりつと着てすつと立っておられる篠田さんの生き様そのものにあっただろう。偶然ということはあるもので、この文章を書き始めた日のNHKの「ラジオ深夜便」で百歳の時の篠田さんのインタビューが放送されていた。その中で「自由に自分らしく生きたいと願って自立のため書を選んだが、字を書く書道は字そのものの形に縛られるので、そこから飛び出すため抽象画を選び、同時に自由なアメリカを選んだ」と語っていたのが印象的だった。そうなのだ。篠田さんは、自分を自由に表現したいということに子供のころから拘って生きてきたのだ。父親の命令のような「結婚」要請も振り切って……だからいつもきりつとしていたのだ。

篠田さんに一度だけお目にかかった。

20数年前新潟市の「大和」で開かれた「篠田桃紅展」であった。今から逆算しても当時すでに80歳台だったのだろうが、気品に溢れきりつとされていて綺麗だった。会場でしばし歓談させて頂いたが、「もつと早くにお目に架かれれば……」などと失礼なことを言ったような気がする。その時のもう一つの記憶では新潟には熱心な桃紅ファンがいて、「ギャラリー篠田」というのがあってその人がそばについていた。そのことを篠田さん本人も大変評価している。全国でも自分の作品が多く観られる処と喜んでおられたと記憶しているが、この記憶は正しいだろうか？

篠田さんのエッセイをもうこれで読めないのは淋しいと思っていたが、計報関連ニュースの中に次の出版準備として書きかけのエッセイがあったという。いずれ出版されることを期待して待とう。本の題名は決まっただけで「これでおしまい」とのことだ……。これで

おしまいです。どうか楽にしてください。合掌

余談になるが、古今東西の偉人たちの死に際の言葉を集めた山田風太郎の「人間臨終図鑑」によると、勝海舟の最後の言葉が「はい、これでおしまい」だったそうで、如何にも勝らしい。気に入っていても私もこれにしようと思っていたので、篠田さんも同じだったのなら奇遇だ。お仕舞にする年齢は大分違ううえ、私はこの言葉の前に「お世話になりました。有難う」などと言うのだろうか。。。

そんな中、「東日本大震災から10年」という日を迎えた。震災直後に駆け付けた仙台から石巻で受けた印象通り、「10年では何も終わっていない・・・」。この震災ではこんな別れの言葉も家族と交わせずに多くの人々が亡くなった。

